

父は：母は： 広島に静寂の祈り

供養塔に早朝から遺族

無念の身元不明遺骨

【広島市で玉城江梨子】約7万柱の身元不明の遺骨、身元は分かるが遺族が不明の遺骨が眠る平和記念公園内の原爆供養塔。6日は早朝から遺族が訪れ、一般住民が一瞬にして無差別に殺されたことを物語る塔の前で静かに祈りをささげた。

まだ暗い午前4時半。娘の家にいく途中だったと一緒を訪れた佐々木和恵さん(80)と広島市は母親がどこで亡くなったのか分からない。広島第一県立高等女学校2年生だった佐々木さんはあの日、学徒動員で家にいなかった。母は友

人の家に行く途中だったとを後で聞いた。「いつか帰ってくるだろう」と思い、母の死を受け入れるまで6年かかった。「8月6日は静かにしのびたい」と毎年、夜が明ける前に供養塔を訪れている。



暗いうちから祈りをささげる遺族＝6日午前4時半、広島市の原爆供養塔

円形の土盛りの頂点に石造りの塔を据えた原爆供養塔は、1946年に宗派を超えた「広島戦災供養会」によって建立された。当時、爆心地近くは散乱した遺体、川から引き揚げた遺骨などを火葬したが、遺骨が散乱したまま放置されていたという。それに心を痛めた人たちが、市民からの寄付によって仮供養塔、仮納骨堂、礼拝堂を建てた。その後、爆心地だけでなく、市内各地に散乱していた遺骨や引き取り手のない遺骨も納めている。

その成り立ちや塔の形は、戦後、旧真和志村民が建立した糸満市米須の「魂魄の塔」と重なる。「式典には行かない。ここで祈る」と話す中村忠之さん(75)と広島市は、父親の遺骨がない。原爆が投下された時、父親は空襲による火災が広がるのを防ぐため、民家の取り壊しをする「建物疎開」の作業の

ため、屋根に上っていた。原爆の熱線で焼かれ、川に飛び込んだのを近所の人が見た最後の姿だ。「母がその後、捜したけど見つからなかった。母も原爆症で5年後に亡くなった。きょうだけになり、大変だった」と言葉を詰まらせた。広島市は供養塔に納められた遺骨約7万柱のうち、氏名が判明しながら引き取り手のない遺骨の名簿を公開し、遺族を捜している。今年6月20日現在、816柱が引き取り手のないままだ。

2011年8月7日付 18面

☆記事を読み、佐々木和恵さんや中村忠之さんがどんな気持ちで「8月6日」を迎えたのか話し合みましょう。